

CREO



花博記念公園鶴見緑地(風車の丘)

クレオ大阪
マスコットキャラクター
ジャンプちゃん

特集

つながりを社会の中に ～若者支援から考える 誰も孤立しない社会～

- 【連載まんが】
- ジャンプちゃんおしえて! 男女共同参画ってなあに?
- ep.11「家事は誰がやるの?」

- 【男女共同参画TOPICS】
- 大阪市女性活躍リーディングカンパニー
- 令和7年度市長表彰受賞企業に聞く
- みんなが輝く職場のヒント

- 【女性チャレンジ応援拠点ロールモデル紹介】
- チャレンジの先輩に聞く! 活動の始め方・続け方のヒント
- 庄司 佳奈さん(城東区東中浜地域活動協議会 会長)

- 【連載コラム】
- 男性相談から考える社会と私たち
- 「男」の子育て

- 【研究室長コラム】
- もっと知りたい! クレオ大阪
- 男女共同参画センターと子育て

- 無料セミナー&イベント情報(8月～12月)



特集

Interview

つながりを社会の中に

若者支援から考える 誰も孤立しない社会



社会の変化とともに、つながりがいっそう希薄になる中で孤立や生きづらさを抱える若者も少なくありません。誰もが尊重され、自分らしく生きる社会を実現するために、今、私たちに求められていることは何でしょうか。子ども・若者支援に取り組む、今井紀明さんにお話を伺いました。

声を受け止め、支援へつなぐ

—現在の活動を始めたきっかけを教えてください。

活動の背景には自分自身の経験があります。私が高校1年生の時に起きた9.11（アメリカ同時多発テロ事件）をきっかけに、紛争や貧困の中で、理不尽な状況に置かれている海外の子どもたちの現実を知り、強い問題意識を持つようになりました。その状況を変えたいという思いから子ども支援の活動を始めましたが、19歳になる年にイラク人質事件に巻き込まれ、帰国後に大きなバッシングを受けました。PTSD^(※1)やパニック障害を経験し、4～5年ほど苦しい時期が続きましたが、家族や友人、高校の恩師に支えられながら、少しずつ社会生活を取り戻していきました。その後、海外支援のボランティア活動等に参加し活動をする中で、日本の若者の状況にも危機感を抱くようになりました。海外では紛争や貧困など、目に見えやすい困難がある一方、日本では一見すると見えにくいものの、生きづらさや孤立を抱え、誰にも頼れずにいる若者が増えていると感じたからです。令和7（2025）年の小中高生の自死者数は、昭和55（1980）年以降、過去最多となっています。そのことから、深い孤立や生きづらさを抱えていることがうかがえます。行政や企業だけでは支援が届きにくい領域がある中で、つながりを社会の中につくり、孤立させないセーフティネットを広げるためにNPO法人D×P（ディーピー。以下「D×P」という）を設立し、活動を行っています。

—具体的にどのような取組をおこなっていますか。

D×Pでは、13歳から25歳までの子ども・若者を対象に、オンライン相談事業「ユキサキチャット」や、大阪・ミナミで「ユース

センター」の運営などを行っています。

自死やいじめに関する相談窓口は、これまでも行政などによって整備されてきましたが、生活や福祉に関わる困りごとをオンラインで気軽に相談でき、その後の支援につなげる仕組みは、まだ十分とは言えない状況です。こうした中、「ユキサキチャット」は、若者の声を受け止め、必要な支援へとつなぐ重要な役割を担っています。相談を起点に、進学や就職、福祉制度の利用につなげ、生活の安定に向けて伴走しています。

一方で、繁華街には孤立した状態にある若者や、支援を必要としても自ら相談することが難しい若者が多くいます。「ユースセンター」では、そうした若者が安心して立ち寄れる居場所をつくり、関係を築いていくことを軸としています。「相談するための場所」ではなく、友人と立ち寄りたり、一人で過ごすこともできる“居場所”として運営しています。食事の提供などを通して交流し、居場所を求める若者が、自然な形で相談につながる環境を整えています。「関わり」を続ける中で、住まいやお金、妊娠、性被害といった様々な問題が少しずつ見えてきます。

性別や環境が生む孤立と生きづらさ

—若者の生きづらさの背景にある社会的な課題について教えてください。

まず現場で感じるのは、「つながり」が本当に少なくなっているということです。核家族化が進み、親戚や近所、地域との関係も希



薄になる中で、安心して過ごせる居場所や人とのつながりを持つ機会が減っています。子どもたちを取り巻く環境が変化する中で、家庭や学校で困難を抱えた場合に、支えとなる場所が少なく孤立しやすい状況になっているのです。

「ユキサキチャット」では、相談者の約7割が女性です。寄せられる相談には、不登校や虐待、家庭内の不和、経済的困窮などが重なっているケースも多く、相談につながる女性の中には、働いていても非正規雇用などの働き方により、経済的に不安定な状況に置かれている人も少なくありません。また、経済的な余裕がない中では、生理用品や化粧品など日々の生活に必要な物品の購入も大きな負担になることがあります。こうした状況も踏まえ、食糧支援の際に生理用品も届けるなど、一人ひとりの状況に応じた支援を行っています。

「ユースセンター」には、様々な困難を抱える若者が訪れます。「夜の仕事」に従事せざるを得ない状況に置かれている若年女性や、住まいを失い生活基盤が不安定な若者など、抱える課題は性別や環境によって異なります。課題の中で共通して見えてくるのは、相談することへの心理的ハードルの高さです。特に男の子の場合は、「男は強くあるべきで、人に弱さを見せてはいけない」といった「男らしさ」に縛られ、相談することに強い抵抗を持つケースがあります。固定的な性別役割分担意識も、相談のしづらさや生きづらさにつながっていると感じます。

また、D×Pでは、妊娠や性に関する相談にも対応していますが、性教育についても、社会全体としての取組が不足していると感じます。一因として、SRHR^(※2)の考え方が、まだ十分に広がっていないということが挙げられます。「身体を大切にすること」「相手を尊重すること」「自分らしさを知ること」も含めて、性教育というも



支援物資を箱詰めする様子。若者とのつながりを支える取組の一つです。

今井 紀明さん

(認定NPO法人D×P 理事長)

昭和60(1985)年札幌生まれ。高校生のとき、イラクの子どもたちのために医療支援NGOを設立。その活動のために、当時、紛争地域だったイラクへ渡航。その際、現地の武装勢力に人質として拘束され、帰国後「自己責任」の言葉のもと日本社会から大きなバッシングを受ける。結果、対人恐怖症になるも、大学進学後友人らに支えられ復帰。偶然、中退・不登校を経験した10代と出会う。親や先生から否定された経験を持つ彼らと自身のバッシングされた経験が重なり、平成24(2012)年にNPO法人D×Pを設立。平成27(2015)年に認定NPO法人としての認定を取得。



認定NPO法人D×P
ホームページ

のは本来幅広いものです。自分自身を大切にし、他者との関係を築いていくためにも、こうした学びが広がっていくことが重要だと考えます。



「ユースセンター」の様子。交流を通じて安心して過ごせる居場所となっています。

未来に希望を持てる社会に向けて

——一人ひとりが尊重される社会のために、私たちにできることを教えてください。

私たちができることは、先入観で人を見ず一人ひとりの声に耳を傾けることではないでしょうか。近年は趣味や嗜好、働き方や生き方も多様化しています。かつてのように多くの人が同じものを共有する時代でなくなっているからこそ、「若者はこういうもの」「女性だから」「男性だから」と一括りにするのではなく、その人自身に関心を持ち、理解しようとする姿勢が求められています。社会が変化する中で、安心して過ごせる環境や自分の気持ちを受け止めてくれる人とのつながりは欠かせません。

D×Pでは、否定せず関わる姿勢を大切にしています。本人が自分のタイミングで一步踏み出せるよう寄り添いながら関わっています。人にはそれぞれ異なるペースやタイミングがあります。答えをすぐ一つに決めつけるのではなく、その人に合った歩みを支えていくことが大切です。安心して信頼できる関係の中でこそ、自分の可能性や選択肢に気づき、本来の力を発揮できるのだと思います。一人ひとりの違いや生き方が尊重され、希望を持って生きられる社会になることを願っています。

(※1) PTSD(心的外傷後ストレス障害)…死の危険に直面した後、その体験の記憶が自分の意志とは関係なくフラッシュバックのように思い出されたり、悪夢を見たりすることが続き、不安や緊張が高まったり、辛さのあまり現実感がなくなったりする状態。

(※2) SRHR(Sexual and Reproductive Health and Rights)…性と生殖に関する健康と権利。自分の身体や性や生殖について、誰もが十分な情報を得られ、自分の望むものを選んで決められること。





ジャンプちゃん おしえて!

ep.11

家事は誰がやるの?



クレオ大阪
マスコットキャラクター
ジャンプちゃん

男男女女共同参画 なになに?

男女共同参画について

かわいく、わかりやすくまんがで解説!
ジャンプちゃんと一緒に、学んでみましょう!



作者:あい
二児のママのコミック作家。
Instagram(@yui_dondon)などで
漫画を発信中。



解説コラム

みなさんは「家事」という言葉からどんなものを思い浮かべますか? 「料理、洗濯、掃除」など、すぐにイメージできるものから、例えば、トイレトーパーや洗剤の補充、ペットボトルからキャップや包装を分別する、登園する子どもの持ち物を用意するなど、小さなことのように見えても、毎日数えきれない量の「家事」が生まれ、それを担う人がいます。「自分で全部やらなければ」、「言われたら手伝おう」と思ってしまいませんか? 様々な家事に目を向け、家族みんなで分け合えば、家の中のことがスムーズにすすみ、気持ちよく暮らせるようになります。これも、男女共同参画社会実現のための大切な一歩です。お互いを思いやりながら、心地よい暮らしにつなげていきたいですね。



大阪市女性活躍リーディングカンパニー 令和7年度市長表彰受賞企業に聞く

みんなが輝く職場のヒント

大阪市では、女性が活躍できる職場づくりを積極的に進めている企業等を「大阪市女性活躍リーディングカンパニー」として認証しています。令和7年度市長表彰 中小規模企業部門で最優秀賞を受賞した、株式会社イベント・トゥエンティ・ワンのご担当者様に、誰もが働きやすい職場づくりの工夫や取組についてお話を伺いました。



「you happy, we happy!」の理念のもと、全社一丸で挑み続けるイベント21。

令和7年度 大阪市女性活躍リーディングカンパニー 市長表彰

中小規模企業部門 最優秀賞

株式会社イベント・トゥエンティ・ワン

Q 令和7年度「大阪市女性活躍リーディングカンパニー 市長表彰」最優秀賞の受賞、おめでとうございます。改めて、御社の女性活躍推進に関する取組について教えてください。

当社は、性別を問わず能力や成果に応じて挑戦し、成長できる組織づくりを進めています。平成29年度以降、新卒社員は女性が毎年50%以上を占め、営業やマネジメントなど幅広い分野で活躍しています。さらに、客観的な評価（アセスメント）を活用した公正な評価制度を整備し、能力や意欲の高い社員を積極的に役職へ登用してきました。その結果、女性管理職が誕生し、女性がリーダーとして活躍する姿が社内で見られるようになりました。今では「女性だから役職は難しい」という固定観念が消え、性別に関係なく挑戦を後押しする企業文化が定着しています。

Q 受賞後、どのような変化がありましたか？

受賞後は、社内外から大きな反響がありました。特に採用面では、当社の取組に共感した学生からのエントリーが増えています。また、社員にとっても今回の受賞は大きな喜びとなりました。取組が公的に評価されたことで誇りが高まり、ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)※への意識もいっそう深まっています。

※D&I…一人ひとりの個性を認め合い、誰もが活躍できる環境を自分たちで創りあげること。



社内では多くの女性社員が活躍。女性管理職比率は62.5%に。

Q 女性活躍推進に関する取組のきっかけを教えてください。

16～17年前、事業拡大を進める中で人材確保が大きな課題となりました。当時は男性社員4名のみで、体力を要する業務も多いイベント業界では「女性が活躍するのは難しい」という考え方が一般的でした。

そんな中、親交のある経営者から「育児中の母親が働きやすい環境づくり」について話を聞きました。意欲や能力があっても柔軟な勤務環境がないため働く機会を得られていない女性が多い現状を知ったことが、取組を進めるきっかけとなりました。

そこで、正社員の女性採用を積極化し、説明会やホームページで女性社員の活躍を発信するなど、働く姿を具体的にイメージできるよう工夫しました。さらに、結婚・出産後も働き続けられる勤務制度を整備し、働きやすい職場づくりを進めました。女性管理職の誕生を通じて活躍が可視化され、現在では性別を問わず管理職に挑戦する文化が生まれています。

Q 今後の展望を教えてください。

今後も、性別や年齢に関係なく、一人ひとりの個性や強みを生かして活躍できる組織づくりを進めます。「女性だから」といったバイアスにとらわれず、「あなたは何をやりたいのか」「個性をどう生かせば挑戦を実現でき、成果を出せるのか」を仲間とともに考え、支え合う企業文化をさらに育んでいきます。これからも「you happy, we happy!」の理念のもと、誰もが自分らしく輝ける組織づくりを推進し、誰もが活躍できる社会の実現をめざします。

企業プロフィール

- 事業内容：ハッピークリエイト業（サービス/イベント用品レンタル、会場設営・施工等）
- 従業員数：166名（令和8(2026)年6月1日時点）
- 女性従業員比率：56.6%（94名/166名 パート・アルバイト含む）（令和8(2026)年6月1日時点）
- 女性管理職比率：62.5%（20名/32名）（令和8(2026)年3月20日時点）

大阪市の女性活躍推進に関するポータルサイト「きらめく女性の応援ひろば～未来へレディGo!～」もぜひご覧ください。





チャレンジの先輩に聞く！

活動の始め方・続け方のヒント

大阪市内では、おおむね小学校区ごとに「地域活動協議会」があり、地域団体や社会福祉協議会、PTA、NPO、企業などの団体が協力しながら、まちづくりに取り組んでいます。地域活動協議会は、地域の実情に応じて様々な人・団体が協力し、防災訓練や見守り、清掃活動、地域のお祭りなどを通じて、地域コミュニティの活性化や地域課題の解決に向けて活動しています。大阪市では327地域に設置されています(令和7(2025)年1月時点)。

今回は城東区東中浜地域活動協議会の会長として、住みよいまちづくりに取り組む庄司佳奈さんにお話を伺いました。



庄司 佳奈さん(城東区東中浜地域活動協議会 会長)

きっかけはPTA活動

庄司さんの地域活動の始まりはPTA活動でした。「子どもが迷子になったり、急に体調が悪くなったりして困ったときに、周囲の人から声をかけてもらえるように」との気持ちから、小中学校のPTAに加え、区や市のPTA活動にも関わるようになりました。さらに、小学校の総合学習やクラブ活動、地域行事などを支える「はぐくみネット(小学校区教育協議会)」のコーディネーターも務め、地域とのつながりの大切さを実感しました。「5年、10年先も安全・安心に暮らせる地域にしたい。子どもたちが大人になっても帰ってこられる“ふるさと”のようなまちにしたい」。そうした思いから、庄司さんは地域活

動に参画するようになりました。

その後、現在の地域に引っ越した際、当時の連合町会長からマンションで町会を立ち上げてほしいという話がありました。庄司さんは、子どもたちが地域行事に参加する環境を整えたいと実行委員会を立ち上げ、たくさんの方々との対話を重ねながら、約1年かけて町会を設立しました。しかし、立ち上げ後に会長の担い手がいなかったため、庄司さん自身が会長を引き受ける決断をされました。その後、地域活動協議会に加わり副会長を経て、現在は5期目の会長を務めています。

多様な担い手が多様な活動をつくる

東中浜地域活動協議会は、「地域をどのように残したいか」という思いや、「笑顔を守りたい」という願いを持って日々活動しています。庄司さんは、協議会の「アクションプラン・プロジェクトチーム」に所属し、チームリーダーとして地域の多様な取組を企画・推進する中心的な役割を担っています。協議会の活動は、高齢者見守り隊・子ども見守り隊をはじめ、認知症カフェ「ほほえみカフェ」、居場所づくりの「ほほえみひろば」など多岐にわたります。さらに東中浜まちの保健室や、青少年健全育成および世代間交流事業よさこい「TEAMさくら」、地域から子どもたちへ生きる力を伝える中学校での防災教室、あいさつ運動のポスターの作成などにも取り組んでいます。

また、発達障がいがあるお子さんの保護者の方からの「地域での生活に不安がある」という声が寄せられたことをきっかけに、地域の方々共通して感じている「困りごと」を共有する勉強会を継続して開催しています。さらに災害時に地域を守るため、防災マニュアルの

作成や防災訓練も実施しています。あわせて、自力で避難することが難しく支援を必要とする方の把握にも力を入れています。このように、様々な活動を通して、災害への備えや超高齢社会の課題に柔軟に対応できる地域づくりを進めています。

こうした活動を進める中心となっているのが「アクションプラン・プロジェクトチーム」です。町会長をはじめ、民生委員や防犯委員、保護司、子ども会、防災委員、区社会福祉協議会、地域包括支援センターなど、様々な立場の方が参画しています。性別や世代、活動分野の異なるメンバーが多様な視点から意見を出し合い、計画を形にして実行へとつなげています。

チームリーダーの庄司さんが話し合いでいつも心掛けていることは、メンバーの話をできるだけさえずらず、まずは語ってもらうことだそうです。誰もが気兼ねなく声を出せる、前向きで活発に議論できる環境づくりを大切にしています。

活動の輪を広げる

自分が住む地域でどのような活動が行われているのか、興味があっても知るきっかけがない方も多かもしれません。そうした人に庄司さんが勧めるのは、「まずは単発のイベントでボランティアとして参加してみる」ことです。例えば、催しのゲームコーナーの担当など、楽しみながらできそうなことから始めてみてはどうでしょうか。実際に関わってみることで、地域の雰囲気や人のつながりなど、感じることや見えてくるものがあるかもしれません。庄司さんは、こうした「きっかけづくり」をもっと広げていきたいと考えています。

地域活動には、会議資料や事業報告書の作成、会計業務など、地道な作業も少なくありません。自分の時間を費やし、自分のやりたいこ

とができずに後悔することもあります。それでも、イベントで子どもたちが喜ぶ姿を見たときや、メンバーみんなで力を合わせてやり遂げたときなど、やりがいを感じる場面が多くあるそうです。

庄司さんは、次の世代にこのまちをどう残すかを考えながら、自分たちのまちの魅力を高め、住みやすく満足度の高い「選ばれるまち」にしたいと、前向きな取組を続けてこられました。その熱意は周囲にも伝わり、次の担い手へと受け継がれていくことでしょう。



認知症カフェ「ほほえみカフェ」の様子